

方言象徴詞研究の問題点 — 身体感覚を表すオノマトペを中心として —

室山 敏昭

はじめに

「方言資料叢刊」第2巻は、見られる通り、方言象徴詞のうち、全国各地に行われる「感覚に関するオノマトペ」の統一記述、分析の実践である。方言象徴詞の豊かな世界を、我々にまず開示してくれたのは、能田多代子の「青森県五戸語彙」（私家版、1963年）の「副詞と擬態語」という一章である。その後、方言集や方言辞典、特定の方言のオノマトペの記述などによって、方言象徴詞の興味深い世界の一端をかいまみることができるようになったが、全国規模での報告や分析は、現在に至るもなお見られない。本書は、その最初の実践例として、位置づけられることになるであろう。

ところで、本書について、急いで断っておかなければならないことは、「感覚に関するオノマトペ」は、厳密には、「身体感覚を表すオノマトペ」を意味するということである。「感覚に関するオノマトペ」と言えば、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚のいわゆる五感を基準として、それらに関するすべてのオノマトペの記述、分析が予想されるであろう。すなわち、擬声語・擬態語を感覚の種類によって記述し、その種類による量的偏りや形態上の特徴、あるいは共感覚の観点からの分析などが当然予想され、各地方言のすべての擬声語・擬態語が取り上げられていることを期待させるであろう。しかし、全体を網羅した体系的な調査、研究となると、準備や調査時間など多くの問題があり、なによりも本書の量が膨大なものになる。そこで、対象分野を「身体感覚」に限定し、その統一的な記述、分析を試みたわけである。

対象分野を「身体感覚」に限定したために、感覚の種類は大半が触覚に根ざし、ごく一部が聴覚に係わることとなる。したがって、感覚の種類による記述、分析は、方法としての有効性に欠けるため、身体語彙の分類枠に即して記述を行い、全体と各部位との関係に着目しながら、形態上の特徴、語彙の量的分布、意味の細分化、感覚の評価などの観点から、簡単な分析を施すこととした。

本書の目的は、統一的な調査方法によって得られた「身体感覚を表すオノマトペ」に関する、全国的な規模の精細な資料を学界に提供することにある。本書に盛り込まれた内容を、多角的な観点から分析することによって多くの新知見を得、また、新しい問題を発見することは、すべて今後の課題に委ねたい。そのためにも、本書が、できるだけ多くの研究領域に属する人々によって取り上げられ、広く活用されることを希望する。

以下には、筆者が行った調査結果を中心として、「身体感覚を表すオノマトペ」に関する問題点について、ごく簡潔に私見を述べることとする。

一 形態上の特徴

日本語の象徴詞における形態上の特徴に関しては、小林英夫に詳密な論（「国語象徴音の研究」『言語学方法論考』三省堂、1935年）があり、また、鈴木孝夫の「音韻交代

と意義分化の関係について —所謂清濁音の対立を中心として—」（『言語研究』第42号、1962年）が示唆的である。方言に関しては、筆者の「鳥取県西伯郡中山町八重方言の擬声語・擬態語」（『方言副詞語彙の基礎的研究』たたら書房、1976年）などがある。したがって、国語象徴詞の形態上の特徴に関する考察は、それらの論考に譲ることとし、ここでは、「身体感覚を表すオノマトペ」の形態上の特徴として、次の四点を挙げるにとどめる。第一点は、「ズキッ」「チクッ」などの「単位形+Q+ト」の形態と「ズキズキ」「チクチク」などの単位形の反復形態との対立である。前者は瞬間的、一回的感覚を表すのに対して、後者は一定時間断続なく続く感覚を表す。第二点は、「カサカサ」／「ガサガサ」、「ヒリヒリ」／「ビリビリ」などに見られるいわゆる清濁音、清半濁音の対立である。後者は、ともに感覚の程度性がより大になる。清濁両語の指示的意味は同一の範疇に属しているが、音の対立によって感覚の程度性が弁別される。第三点は、「ズキズキ」に対して「ズッキンズッキン」の/Q/、/N/が、いずれも感覚を強調する音象徴効果を担っているという事実である。これらの三点は、いずれも音価が与える印象が意味の差異として、言語体系に取り入れられた例であって、各地の方言辞典などによって確認する限り、広く日本語方言全体に認められる普遍的事実と言ってよからう。第四点は、反復形に関して2音節の単位形の四回反復形がかなり多く認められる（八重方言の場合は16語）のに対して、単位形が3音節、4音節の場合は二回反復形しか見られないという事実である。「瀬戸内海域方言の副詞語彙の研究」（広島大学文学部「内海文化研究紀要」第4号、1976年）の「擬声語・擬態語」を見ても、8音節以上のものは認められない。オノマトペにあっては、語形を8音節以下におさえようという地域社会の人々のリズム感覚に基づく「音節数制限の原則」が指摘される。また、宮崎県延岡市方言の場合、「ビリビリー」「ヒリヒリー」（舌の感覚）、「シワーシワ」（胃の感覚）のように、語末の母音や語中の母音を長呼する形態が認められ、引き音節が感覚の程度性を強めることに関与している点が注目される。

二 身体部位による量的偏り

広島県下大椿方言、鳥取県八重方言、宮崎県南方方言のいずれにおいても、「身体感覚を表すオノマトペ」には、身体部位によって語彙量の分布にかなり著しい差異が見られる。今、下大椿方言を例に引くと、次の表のようになる。

身体部位	語数	比率
全身	10語	12.6%
皮膚	18語	22.7%
頭部	27語	34.2%
胴体	14語	17.7%

左の表によって、全身の感覚に係わるオノマトペの比率と各部位に係わるオノマトペの比率を求めると、35.3%（全身）：64.7%（各部位）となり、身体呼称（部位呼称と形状呼称の両者を含む）に比べて、全身の感覚に係わる比率の高いことが注目される。また、各部位の比率に関しては、頭部の比率の高いことは、身体呼称の場合とバラレルな関係にあるものとみなされるが、皮膚に関する比率の高い点と手足に関する比率の低い点とは、身体呼称に比べて対照的である。八重方言の場合も、全身の感覚に係わ

手足	6語	7.6%
関節	4語	5.2%

る比率と各部位の感覚に係わる比率は、31.7% (全身) : 68.3% (各部位) となり、下大椿方言に比べて特に有意差は認められない。頭部に関する比率も36.5%で、下大椿方言の場合と、ほとんど一致する。南方方言は41.5%であり、やや比率の高い

ことが注目されるが、頭部に関する比率の最も低い下大椿方言よりも7.3%高いだけであって、各部位の量的構造が大きく異なるということはない。全身の比率・皮膚の比率の高いこと、頭部の比率の高いこと、手足の比率の低いことの三点は、三方言にほぼ共通して認められる事実ということになる。「身体感覚を表すオノマトベ」に見られる、このような身体部位による量的分布は、身体呼称に認められる量的分布とは、かなり異質な様相を示すものである。

両者の間に認められる量的分布の差異は、おそらく、一方がオノマトベであり、他方が名詞であるという品詞の違いによって規定されるものではなく、認知される感覚の違いに根ざすものであると解されよう。「身体感覚を表すオノマトベ」は、「鼻」の「ツント・ツント」、「舌」の「ヒリヒリ・ピリピリ」などの臭いや味に関するオノマトベも、基本的には触覚に根ざすものとみなすことができ、したがって、ほとんどが触覚によって認知され、造語されたものと解される。これに対して、「身体呼称」は、基本的には視覚によって認知され、造語されたものである。

三 複数の部位に出現するオノマトベの性格

身体感覚を表すオノマトベにおいても、「ヒリヒリ・ピリピリ」(皮膚の感覚・舌の感覚、ピリピリは極度に緊張した心理状態も表す)、「スベスベ・ガサガサ」(皮膚の感覚・手足の感覚)などのように、複数の部位に出現するオノマトベが認められる。このうち、「皮膚の感覚・舌の感覚」を表す「ピリピリ」と極度に緊張した心理状態を表す「ピリピリ」との間には、少なくとも意味的な重なりは認められないから、両者の「ピリピリ」は同音異義語の関係にあることになる。同音異義語の存在は、言語記号の恣意性の証拠としてよく挙げられる現象である(ウルマン「言語と意味」P. 91~2)。したがって、オノマトベといえども他の一般的な語彙と同様に、かなり恣意性に近い性格を持っていることを、まず、指摘しておきたいと思う。

ところで、下大椿方言や八重方言において、最も多くの部位に出現する語は「ズキズキ」である。「ズキズキ」は、「皮膚の感覚」、「頭部の感覚」のうちの「頭」「歯」、「胴体の感覚」のうちの「肩」「胃」の五つの部位に出現し、しかも、「ズキット」「ズキズキ」による瞬間的対持続的という弁別、「ズキズキズキズキ」「ズキンズキン」「ズッキンズッキン」による程度性の細分化が認められる。さらに、八重方言を例にとると、「ズキリズキリ」「ズクズク」「ズクズクズクズク」などの語形も行われており、「ズキズキ」の延べ語数と合わせると、12語が認められることになる。これは、八重方言における「身体感覚を表すオノマトベ」の総延べ語数の9.5%に相当する。下大椿方言においては、12.7%の比率となる。これらのことから、八重、下大椿の両方言においては、「ズキズキ」という痛みの感覚を表す語が、「身体感覚を表すオノマトベ」の中でも最も

基本的な要素の一つであると解される。南方方言の場合も同様である。これは、同時に、「身体感覚」の具体的な感覚が、「痛み」を中心とするものであることを示唆する。事実、八重方言においては、「痛みを表すオノマトベ」が全体の42.4%を占め、下大椿方言においては、45.6%を占めているのである。

四 快・不快の感覚の量的偏り

下大椿方言の身体感覚を表すオノマトベを、快の感覚と不快の感覚という観点から見分けてみると、快の感覚を表すものは、わずかに8語(10.1%)が認められるだけで、他はすべて、不快の感覚を表すものである。また、快・不快に係わらないニュートラルな語は認められない。身体感覚を表すオノマトベは、概念的には快・不快の感覚が二極対立の構造を示すものと解されるが、語彙の実態に即して見ると、極端に不快の感覚に傾斜した構造となっているのである。これは、おそらく、快感覚を通常・正常の感覚と認知し、それから逸脱する異常・異様な感覚に対して、地域社会人(日本人)の認知が焦点化されていることの反映である、と考えることができるであろう。八重方言においては、快の感覚を表す語彙の比率は、わずか5.6%に過ぎない。これは、八重方言の延べ語数が下大椿方言よりも48語多くなっているためである。したがって、延べ語数が多くなるのに比例して、不快の感覚を表すオノマトベの語数も多くなる。この極端なまでの「下向性の原理」は、「身体感覚」が基本的には「身体異常の感覚」であることを示唆する。

五 地域性の確定から外国語との比較へ

以下に、今後の課題に触れるならば、以上の諸問題について、各地方言の詳密な比較研究を行うことによって、地域性を確定するとともに、地域差をこえて認められる普遍的な傾向性・原則を解明することが、まず、志向されなければならないと考える。ついで、オノマトベも、外界の音や有様の単なる写しではなく、意味の支えを持った、社会的な言語体系の一部をなすものであるから、一般的な語彙と同じく、これもまた現実世界のカテゴリー化の一形式であると考えられる。現実世界をどのように捉えるかが、各言語の意味のポイントになっているとすれば、オノマトベに関しても同じことが言えるはずである。したがって、日本語方言の象徴詞の研究は、いきおい外国語の象徴詞との比較・対照研究へと向かうことが要請されることになるであろう(亀井孝「“音象徴”散語」「日本語教育」第68号、1989年を参照のこと)。各言語に見られる現実世界のカテゴリー化の差異は、福井勝義の「認知科学選書21 認識と文化 民族誌的考察」(東京大学出版会、1988年)を引くまでもなく、共通語のレベルよりも方言のレベルに、より明確に認められるはずだからである。特に、この点に関して、筆者の興味に引きつけて言えば、「ピリピリ」「チクット」「チクチク」「ズキズキ」のような触覚に基づく「身体感覚を表すオノマトベ」が、心理的、感情的な側面を叙述する表現としても用いられるような例が他の言語にも見出されるかどうかという問題を挙げたい。もし、「オノマトベ」を用いる諸言語において、このような事実が普遍的に認められるということになれば、いわゆる「身と心」との関係について、「身体感覚を表すオノマトベ」の解析が、重要な位置を占めることになるからである。

(むろやまとしあき 広島大学文学部)